Go-Ahead

2

学び続ける教師のために アンケートの感想から

いよいよ今年度も中盤を迎えました。10 年研を受講されている皆さんにとっては、夏季休業中も選択研修の受講などで慌ただしく過ぎ、2 学期に入ると、行事の実施などで学校の中心で忙しくされていることも多いと思います。振り返って、第 2 回共通研修では — なんだかほるか前のことのように思われますが — 、神戸学院大学教授、立田慶裕先生をお招きしました。先生は国立教育政策研究所の名誉所員であり、教育に関する著書や訳書も多数執筆されています。この研修のタイトルは、先生の『キー・コンピテンシーの実践』という著書のサブタイトルから取らせていただきました。

「学び続ける教師のために」というタイトルから、教育現場中心の話を予想していましたが、TALIS の調査や OECD、グローバル化など、社会の変化までお話を聞くことができ、とても興味深く聞きました。

よく耳にするキーワードが多く出てきて、知っていたもの知らなかったものが混在していました。改めて勉強不足であると感じました。そんな中でも限られた時間の中で分かりやすく説明していただきありがとうございました。

そもそも OECD は経済協力開発機構。そんな OECD が、なぜ PISA や TALIS など教育に関する調査研究を行っているのかということには注目しておいた方がいいのではないのでしょうか。また、キー・コンピテンシーという言葉も、なぜこのような舌を噛みそうな、難しい言葉を使うのでしょうか。これらを理解することで、教育が世界でいかに期待されているのか、教育の役割や大切さを、いまさらながら理解できます。教育をめぐる世界の動静や、21 世紀の教育が目指すべき方向性が集約されていると言えます。私たちは最前線で、教育に携わっているのです。

後半のグループ協議では、日々先生方が感じている課題と対策について、アイデアを出し合いました。

・グループでの話し合いによって、日々感じていることを他の先生方も同じようなことを考えているということを知れたことによって、「自分だけじゃないんだ」とすぐに解決することが難しくても、また、がんばっていこうと思える時間になりました。

・学び続けるためには自分自身も見方を変えて、柔軟に考えていけるようにしないといけないと改めて思いました。

しかしその対策は、学校現場の工夫や『カイゼン』で何とかできそうなことから、人員の配置や教育行政の問題まで様々だったように思います。TALIS の調査では、仕事は勤務時間内に収まらず、持ち帰りの仕事も多数。土日出勤も常態化している中学校の教師の姿を浮き彫りにし、いまさらながら忙しすぎる日本の教師の勤務実態を明らかにしました。一方 PISA の調査では、教師の専門性や、授業スタイルなどにおいて 21 世紀型教育からは立ち遅れた日本の姿が明らかになっています。「自分自身の見方を変えて…」教育を眺めた時に、つまり新たなフレームで教育を見た時に、新しい解決方法が見えてくる可能性もあります。日本の教育をどのように進めていくのか、知恵を出し合い、学校をマネジメントすることが求められます。

“生涯学習”とよく言われますが、まさに教師自身が学び続ける存在であることが、大切だと改めて実感しました。10 年サイクルで刻々と変わる（変わり続ける）教育の課題と現状を、こうした研修でしっかり学び実践に活かしていきたいと思えます。

私たち自身が学び続ける存在であることは、教師にとって最も大切な資質ではないのでしょうか。生涯学び続けようとする私たちの姿は、子どもたちのモデルとなり得ます。『キー・コンピテンシーの実践～学び続ける教師のために』秋の夜長に、是非、読んでみてください。